英乃一蝶

12
881
18

繪合

巻名 以詞号せるなり此巻乃絵合ありし内にて又弥生とも

えらひなり天徳の歌合に模して書りとみえたり

冷泉院と村上とに比しかへるなり源氏卅一歳乃三月也梅壺

の女御をさす廿九歳乃年の秋に女御前斎宮乃御参

なれは廿九歳乃冬なるへきをなに也かんと入内ありて後は古

宮は紀の周忌前月迄なかりし給ひまゝに入内ある人

し正二月乃間に入内ありて此絵合やかてならへきし

きたなき 案 此巻は八詞紙また乃とまさる也源氏卅

一歳乃事此巻にかんとするなり廿九歳なれは是梅壺

にもさるなりむと源氏ましの零標巻此巻となるなり一年経てや

絵合の例をは後拾遺集乃詞に正子内親王絵合なれは

かんとするなり扇合草子合根合なとといふをまて絵用

とせり此絵合ハ三月比也斎宮女御と弘徽殿女御也
此絵合乃要故ハ是非なとある也
前斎宮の御ことなり 細 秋好也冷泉院の女御にまいり給也
斎宮ハ人道家ありて入内乃沙汰にも及ぬなり 花 零漂
まことに伊勢より御帰京し給ふと年廿二主上ハ十三
御年ハ姉給ふなるへし 宗 斎宮を我御為に御妹とおもふ
中宮乃御心にハかれこれあるまし給ふ事見られるかとも
らひまゐて 細 藤壺也清出家の後なれとも只今別ての中
宮ある故に院ハ中宮へは御後見あるゆへにかくてのちの儀の源
心此入内乃事可然也と思ひ給ひし由零漂の事に見えしなるを
弄 藤壺一向にと中宮そくましく御うしろ故にかくハ云也
宗 是も皆中宮の御事なりと云也斎宮入内を御給ひし也
とる也たてまつるおほしめし給ふともあるへしとおほしやる也

細 源乃心 宗 源氏の心也とおもふて斎宮しうるさに御給
ひんと見まほしくおほしまさるとる也
打御後ハ院にもさまかきめさんさ代はくおほす給ふ
宗 内と朱雀院ハ斎宮とゝもにおぼし給へる也ある事にいうて見
て当代乃冷泉院へまいらせ給ふかたち見ゆるの給ひし御心と也
二条院よりさし参らん事ともさひハ打御覧しとあさりて
なまじきこととも思し召すかへれとおほしうるのことくとも八
とるとさちしくおほやめ紀也のと給ふ 弄 二条院よりと入内ある
せるやかと給ふへくとも朱雀院とおもふともと給ふ也 細 二条
院よりと入内ある人さうれと給ふれと院へ乃御心とお
ほしてうきさへに行也
院ハいとに打し見お聞しめをも思ひとはかりあれた
宗 朱雀院是無本意事に入内を思給ふ也

清せうとこそをきこえ給ふる紙 宗 兵部卿宮への清文ちをも絶たる也
その日よありて 細 兵文入内此日也
えんなるめ清よりをひとさき 宗 朱雀院よりも清ちを兵文
へ参る事
清らしのまことをちみてるを此ちこかうこれをとゝもよの清
なりまて 花 うちわたる人のまこのゆへふさく八髪なと
あつる時うちさうし侍れと弟乃ゑふるうきを侍るへし
弄 うちわたりの弟也ハ髪此具なりれハうちみなるとなふ也
かうこ乃弟とを是渇丁也 細 うこれにの字清濁両様也
於 うこれにまし可濁一近 宗 香壺箱様と書る紙納ある
壺あり
くさく乃清うさき物ともらん見なりまくさる此さ度又百歩
のほとをおほくさえみみまて 宗 いまさる此との心也

百歩乃ほとは一歩ハ六尺百歩ハ六十丈なるへし
とをくゝかほるといふ心也 河 薬之ゝさゝくとハ総を
薫物也 合香方 春 梅花 夏 荷葉 秋 菊花 冬 落葉
黒方 侍従 供香 薫衣香 補闕 百和香 なとゝて
数多方あり 又百歩香ハ 蘇和 百歩香 此心也 仲方云
加之 燈中ニ盛埋テ三七日テ 死焼ニ 百歩之外聞香ト云く 梅枝巻に
見え之 弄 百歩のほとゝいふ心く 薫香乃匂ひ也 細 百歩の
ほかまても 於 又その外の方ハ 薫衣香と云一説也
心をとゝのへ侍る給へり 弄 朱雀院よりとも やきし
きこえ給ふをわくして
おとゝ見給ひもせんかたなきやうにはしめてきこえん人を
ゆるさとなめしかめ 細 源氏さめて見給へさとて也
履もかくつる御もとみく 宗 源氏も兵部卿宮へ御文清書

あるなり
かくなんと女別当法楽せさせ　宗 秋好ハ見ゆや也源氏ノ
見ゆ中宮也寝殿そのまゝ住給ふなんとおまし八源
氏も法楽したまふ也　細 源よみをよする也
弁 女房が当座一首ニ梯ニ也
とかく法楽し此たての内にを見て給ふ也せ候ハ
あるとあ家とてものゝしきさ成也　細
旗よ法楽して大やうに上薦しき様称んと行て見るる
かし 宗 たての地をいつれとも是れ一様なる法楽を
しあるん秋好の大様なる心あるへしあるさいふ字感
これたつとかうさと法楽なる成へし
ていく此笛乃心あるに 河 へたて心気也さはさく梅乃枝を是
たちやなれ小忌附冠ニ梅也女房の綱度ゟとなりて一流云

継起乃也或後とも云也花ゟしら此笛令紙乃時絵
の笛は守松乃柎枝露あるを詩也天暦二年花宴
清涼殿の花心気花とて近代清涼物打あめの四角に
いとうすくみえく松枝をさしていひとみとく気色と結て露あるを
後くらへるるあるも心気のよしありしと云らく
の笛みをいみて花とけくみて云へ様乃紙云なし
ある梅とも地をうとあり　弁 とゟしや也見て御梅を
一首一勅命宮乃寄よ云し給へときしうし申之
是 宗 松首ハ寒賤よけしる紫よとしをさすといふ
礼義也是引事以まて自然のなる也
遠方の風情乃燈焼と作るとうき花よと也清にさいふ
拾遺ニゆくゑのイ
流りくぬ笑む人ハ心気ハそのまゝの様乃生る色ありある
別路よりなきとみてたるまる花中を袖やかさいろし

花 朱雀院の御子也此姫宮御母ハ朱雀院乃御在位
乃時の事也法額よりしと侍りしハ二ざひ京のうへお
ましまし給ひしを此御法の御事ありきとかくい
きことみて我方よかくと給へる人さ中也御のいさめ給
へるなくなく事也云々也猶をハ髪よさせへられと又
御ともへとふる事や 細 桐乃まてなくなのかしはし
給時後京あるまししき也此法相とくはまなくまた
られる中此髪よ御のいさめ給うとも也
おとろれと法師のしつまく御用しめてまたにとろくし
事あるへと打くそやう心の事とひ 細 猶く乃法音後也之
うさよかん給也法華あるとハよくさ給なくハ二人のす并同
花 猶く此法道我とよ我源ハ法師んあるも也桐壺充
あやしなる事もと侍とて 栄 源氏の御くをなくまとかるも

うすと打かりしある所をとく御此法んともありしまいとも也
御の事するを給ひし法と侍心よおすかりしんまとうとしへてし
ア給ぐ事侍んはしとも二ま給へさ頭よりかちとひあれ
ある我心ふお御をしん法位をはかまのさかりなくせをと
らしめしとやおお御らんりれよあかりて心うらく恋紀かられ
也おほしつもを給わたりと打しく 栄 女三宮よ給ひて法え
まの御より法心をとうあ給へてされ法本ことをしと事
給へさを冷泉院へ参り給へてされをとう御ほとひ
給をもいへる也 細 冷泉院へ参り給ふ朱雀院の法さ
らをしたらまをか也
ちうかくあおちをするるを我めひりし秘くく心くるまし
打まかりしあやまはん 細 此入内のよすハたくまあるうひと
つの事なる中也 栄 源氏の御女宮入内のよしを云興此

あらむと云事を給て院の御心とさやすまらんと也
はしくおほえしらぬにしのも 細 御子の左遷のとき 宗是
附りしる給也
まことおすべしう哀なる御心まくとあると云ひこうされ給て
細 朱雀院御心ひとつにあくもあまたとおもへる也
とまらまたうちなるめ給へり 河 附日本紀者りしとあらぬ也
附さるを也者りしく思ひ也
此御色ハいかやうにかおほしさを給ふらん 細 源乃詞
又御せうそこハいかなるとおもふし給へといひとおもふいへるを
述也 弄 朱雀よりある事れ文のなき也 細 院よりハ御文ともなへ
さかや也 宗 朱雀院よりの文を源御覧給也
御文ハえひきかへてほそやいかやまし前斎宮御也
宗 たまてむまきつ文をくありまれ也

御返りハいとく聞えにくう給へと御覧し給ハ御心とも いとあはれを
あつかはしき物のあはれなる人なりけんとおもへるひとつ心御返
きこえ給ひを御覧給ふ 宗 入内乃御事これハあさましう事かきこゆる也
いとおもはしき御事なりやおもふらんことをおほしきを給へと宴
え給ともいとえうりしられと 花 源の詞也と此段て御文
うちひるとはえましき御事なれとも思ふうしえ
くらゐやさしさを給へと也 細 御返りをちかくてハけしきこえと
やさしうしそうかなとハ二度もいとまてハかくとも中されなよ
やや 宗 源氏の御返事もあへてれそうの心あり御覧給て
御返事もちかくあいとも也
いうしへとおほしいふうたいとあさめ紀きこゆるにふくいかかんとう
あすれなのひし御機をとうことえおもてあつく 河 これとみてそてなうり
給し御形され心もえらくされとしおほゆるに 細 大将殿

みくしけも御櫛をさし給し事なとも也　弄　斎宮
の御下也むかし伊勢へ下給時大極殿にて御わくしを
斎宮の御額にさし給し時朱雀院の御詞おもし給
ひしと打さなからし打かへし今此やうにおほゆる也
其時は朱雀院廿五斎宮は十四の時成へし
故御息所の御事なとうちさへつらね義によりおほされてかく
く　細　御息所を同輿せられし也　花　上にとは朱雀院の御
心によりおほしめしける也　弄　其折のことにやとて無念
を帝の御心と絶おほしめしてはかなりしある也也
かゝる事てなからへ給ひ一こともなくかくて物はといそうすへき
弄　斎宮御方也かゝる事てさるかたにひ一ことも御
別のくしを給し時の御詞也くりてハ御京也也まうも
其時は難答なりしことあれとも今となりはさとや

上の御事にも御心の底にかくされはしぬ義によりおほさ
れてとあれはそれにとふれかく御て物はかへしとよ
み給へるにやとて　細　かくろへて也は御京ありて御
心もとしつひそとの給しへきにしとなれとも也
ともやなきか御使の返しにも給はぬ　弄　此詞其下の批判也
おもくハ御返事といと悔しう思召せとも此事を給ふは
弄　源氏の御返事せぬとの心也
院の御ありさま女にて見たてまつらまほしきを此御方にも
も御をふくらもいとよく似給ひてある様　細　源の心也
秋好の御かたちを院と心のをにゝ思ひ給へるさまとやうなりさまた
にやり給也　弄　院は卅三斎宮は廿二歳御年の程とよ
きさはあひひと也
うちハまさにと心をおもくおもし　まほしめたいらく

雲ゐの紀人に　宗 冷泉院八十三歳　新式云ハ漂

中の波乃年ふりてあしたに三年めなる人へし　内ハ八十三歳

ちりもとふく折りしまほ色し　他志あるく法年乃法

法云用かや

抑さやおほせらんなると　宗 院乃御心紙なり

私 森宮乃心ととらべき

みくさるをとりへおほしやりたくむもつてまつるへとをつま

ありておりしともむへきるゐしてあしくねハことをはおるへき

さ故よの給をとさせてむつましくおほして　宗 森宮乃心

を源氏のもとしもちなるて云ひ給也 冷泉院へよりけり

給ふハおほそしうる心也 森女ハさやうなることか

ほしうねあるをとさきてとて源乃将をひよなる給

ふみくてこちとや

あつまの宰相とまりしくはうつさる人々との給ふく　細 参議

みくく修理大夫なとある人々人へし 京亮ふりかくはと

うちに参り給ね　宗 源氏ハ極秘給をとられて法へ参り

給ふとや

うちまゐるとたるおやほさふきそめて御紀しと深をはく

ゑ宮のと紀ひく　宗 まつくも紀なる数れ極まはあるてとも

法をるくひきなるとそ乃んを紀へり　宗 森宮乃便おりしま

さねよまなることのかや

よ紀女房なるとくひとよう相ほる宮なれとさやうなかとあし

細 故法息院乃法時はるとすれハ人相ほく法なるひ給也

ともらりはとひてりとおもへあひひおくなまりし

あはれおはせまししひのふひふおはもう　細 故法息不の中

や　宗 源氏之給心也

物かひしうつまし宮もかく此法心をきゝ思召しいつるに
いとゞ哀まし 河 露かゝる絶世 或説か云 是平
大かた此ふつきて八たしかあるしさる人の法を極らや
宗 源氏乃法身法をわり給ふ志給ひ時任と仰ん事とお
そろしき心まとへるさまあらくてまうそにちかしてこれを
たゞしき人のありさ侮とやある事と大かたさやハらへり
さしてえあらぬ物語りかれよしあるまいかさハ何をもくれて
ものかたりことにいひやて常このふ 宗 さやうに可然人ハ字
ニさ物とや心そて此やさしく風流ある人おかうる此物とそや
中宮をもうちそそありしましまもあるらん参 細 落書也常に
ハ三条宮よましう給也 宗 薫宮此入内を結緒ある由
ままします給とや中宮とハこをやましくれとそや
おかりしてやせ見たる人へし

世のしき人をあるまを給へかくきこしめしたれハいとゞいたく
うれ人はらひしてわかしまほ 世のしき人 宗 薫文
の法事也
御とよるきハ見しうされおとるのひ給へり 宗 法の此法ある也
宮とも申く 細 うすき雲也
さうしき人をうり給ふと法心はらひして見え上まくせ給へ
と常の給ふあり さうしき人 宗 薫宮のなすをといへり
御とあさうしうやあらん世を思召しあるのいへる猶あさて
世のつる事を給へりいとはくましき此思召しとらかく 花法の
乃法心よ物ともしたとこしめしてもくうしくるやあら
んとも思召しめしたる也 細 上の法ある事のうちも 宗 法の
此法んを絶の事を東給給ふ心中をさくすくましお召
めす心のやさ事とも思召しあるともハひへり

ちゝやうに　弄　ちいさき也
あへなき事を思ひのゝ給へれハ　猶よりかゝりたる也
弄 思ひ出なるらんや斎宮のことゝふり
いとかしこく御心にかけ給ひし事なり　弄　斎宮を可然と院への御ほ
しめす故也
弘徽殿女御をは後見しつきなれとも思ふまゝにもあらす義にまかす
御事なり　細　致仕の御むすめの女也　かはさるへくもなし故に
おほひきたる事はかゝるひつきなき也　弄　権中納言の女
御かたに弘徽殿にまします故にめしよせて見せ給ふハおほさる
かりそめハ御つかひをもしましく心安御目をもひやこれ弘徽殿
宮ハおほつかなくことゝも院との御心をそちらへたま
いつゝ給ひし
これまた人さ後をも世の給ふといふへきたに　弄　斎宮女

乃御事也
御とて此院を見てまいらせたまふとてかく御そはにさふらひ給ふハおほ
ゆるやうに見たまへて院との御事とハひとつくさきし給
へるうちとくもある院まゝハかうひよりまさりてわたくし給
給ふまゝ　弄　源氏乃御志し給ふ也
おほさうちかに物かりしまて院　弄　弘徽殿の御まゝちに院への
思ふ此御あそひあそひあとみるさ院庭ある也
権中納言ハ思心ありて院のことに給ふたにかくてまへり給ふ
細 致仕大臣ハ此をきて中宮にまもとてまつりつせ給ふ也
新 中納言の女を后にまたとてしに秋好をとてまうけ給ふ也
弄 弘徽殿をは院ふハ后にまたとてまうけて院への御まつりを
給ものことをさへて給とハ此かり御別后に立を蔵宮の乃
人数給へきとも天子ハ白称にまさるへ后ハ月称にまさると

色このみ給ひし権中納言ハ夜家なる故よ后宮とよふより
給ふべし斎宮ハなるを給ふ権中納言ハ偏心の心なるべし
法もとめふせしろふさ侍ふらくれるゝひ給ふ縁ゆくに
やもとう也　宋　権中納言の見出よ斎宮ハおもふらひ也
おもはるべし　宋　例乃批判也
院ゆゝそうのこし此ところの法返法頭んせしにつきても法んも
なまれところと笛りそれハところ担とく此なゝるを給へるに法結給
むかしやうありことのはみてに　院　細　朱雀院也
宋　朱雀院乃斎宮へうし此ところいつせ給ふそれ法返す
と法頭んせるなるべし
斎宮乃ところなるを給ひしゝすさ北くもの給ひ乃間見ハき
こゝゆて給ふあさミすむちすんおなししなると八えおもくりし給
かほ　細　源乃中出して院の法心理もんかへんとて也前ノ

是故かしにおほ侍るゝれし侍とふとも
かほ法ゆしをきうかふをあくて心ふおほゆしきるとゆう
しさふ　既　朱雀院の秋好へ法ゆきを給ふるを世給へる事
かやうふハあくてとうしるを給也　源乃心也
せうゝ心の法とりすを心すゝ給へるに気をする法ゝしと比法をの
宋　あくほ乃者れハいとくゆうおほをてる　細　とうくゆ出し給也
宋　朱雀院の斎宮乃法るすと何ほとおほしめすと源氏
生乃給ひんとてせうゝそれ法んへとの給ひ出給と也
めてたしとおほゆしきさにあるおほくらへ心ゝかやうなる事はしさ
にゝ心ゆしうちひ心をし給へと　細　秋好の御乃るすと
院ハ別乃ゝりしゝ給附乃給しも源ハいまくほのゝにも見
東給ハ法乃気ゆうしをも給也　宋　朱雀院此斎宮
まおほゆしきところゝ給へるゝ心ちとの御ぶなるべし

たゞにえ見給はぬを捨がたき御事におぼしけるとおもほすべく
宗 源氏の斎宮を我はらのやうにおもて志給へども怪しきは
源氏せぬとや識奥ふかく心ありける様也さる事を源氏の
御心くまなき給ふとや
袁ふともいひもてなる様ありけるをいはひあらそはゞ
見ゆるにはいではものしつる 宗 斎宮の横笛也おほさるゝを
しくあらはしてこそ自然は見給ふもあるべくおもふなりお
とろへしぬまじきをおもひてそめも源氏は浅んせぬとや
心はかならずおもひのこるさまされば 細 奥ふかき方心也
見まほしき給にてとおもひいつけとふか事をのし給へり
弄 思ひのまゝしとなりかゝる事にもこれみゆるにをあらず
細 対面にてあるなるべきをとゞめとおもひやうなるともいひたり 宗 此詞は
眼前に斎宮と見給ふなるをあらはにも悲別の様とのおぼえ

此まへには様筋のあらそひしきと此君なるべし
かくもえ給ふさしておはせぬいひ給へば 細 秋好弘徽殿也
宗 弘徽殿と斎宮とのかはりにもとの様をいふ弘徽殿の
御せうとはあらそひ給ふにや
兵部卿宮はあらそひとも見ゆなれば 細 紫上の父宮也
此君もはじめ入内ある人にて事前に見えたるを 孔 豊上文
也彼女は冷泉院へもよりあひねんごろなる御給ひてと見え
給ふべし 宗 薄雲の見えたる也おもしろくいふもとをやらに
をとこは御むすめを女御にてたいせ給はぬとや前々より
女御ふとのならひ侍るべしや
見んことおもひ給ふも 細 外戚也兵部卿宮は薄雲の兄君
なれ也
さるをとてもえおほけなき方にもてなしそのこちたくしき給ふはこれの

法性寺殿もうつくしうにいとしう給へり　系　院には斎宮の女御(ニョウゴ)
みくまし給をもゆく末頼む給とのみ也　甥(ヲイ)　又云姪(ヲイ)母方
うたゝ絵の事になくまて絵をもてある物は物具し
ちかきも　宋乃徽(キ)宗(ソウ)皇帝好(コウ)画(グワ)時書(クワ)及(キウ)第(ダイ)と云事あるに
絵よりなく画乃上手となりるを帝いたく好み給ふに
渡のさるれとさみ給ひてにたのもしき也　系　院ハ斎宮ハ
の中に絵をこのミ給とも及第とハ其中に得たると云事也
これてこれをも給へしよれくかも給ふ斎宮乃女御いとおか
しうかきも給ひたれもこ来ににほひうつりてよろしき給けく
かたうのさまを絵ふ殿上乃わかき人々とも心をうつす御法に
とめて物しき物を御覧しされも　それてこのま
せ給へも　系　前の記して絵をこのミ給とも
ましてかくしまなる人乃　細　殿上人なとも人絵をこのまし

見まさるとハ心とゝめ給へりまして女秋好中宮なとも帝
給をとハ一入深心ようまゐり給也　系　斎宮乃女御を深心
の法ちかりと給也
心ある人あるさ法よ　人ゝ人　河　花見　日本紀
をかしけに深うさすさひ御まめしうるひかしてなよくぬ
てうちやすらひ給つるさ法ちうなまさふ法心とまりていと
らうたけなりしを給ふ　ましかりさに　細　秋好也
あはれなるを法とひまさ其絵描中納言か書き給ひて
あくまてかとくしきを心とめ給へる法人ゝめく新くなり
ことさらなるやとおかしき物をそなへれはしきとも仰せ
あるまじかりきに　深への絵度まるとも梅壺なり
法心のうつる也
めしよせて　系　めしよせてその詞也

いかゝしをいましめて又ある紀にあらる絵とも紙ふるまひなと
いろにたくさあらぬめきを給ふ　新　いとくはかりあるとし給也
栄　これ絵ものかたりとうくし給ふなるへし
物かたり絵にて四季へ見るてみえたるあつめ物なれとも物によ
ろくふたへあつかひたるをえらひつゝるを給ふ　栄　物語絵にある
うすと絵よりも多く紙物語絵と云へり
其人の月次の御絵を見たまへぬ時にまた　新　十二月の絵也
一部云　年中行事絵なとをいふへし　細　十二月の絵なるへし
抄　十二月のさまをかきたるを云也　古集なとも月次の屏風なといふ
を用ゐし也　年々十二月に屏風に絵をかきて奉りしこと
なれとも毎年の事なれは例といへり　法いへとも
を奉る也　女御をも打かへしその屏風を常にまいらせ給ふ
ことに出されたるを此法は一流の秘にし給ふ也　年中

行事にくりしをとみたてまつるを
ことの義をとゝきつくして法流せさるを給ふ也と打しうち
云れた　抄　家なりとも四季にて会くらあるうや　栄　屏風の
絵に朝を云へ人たつるや屏風なとして此十二月の絵を
きらいせ給ふて也見たまふを
又こなたのみくをこれを法しんあるにゐやもくもとつゝきて
行のひとへいうし給ふて　古紀度の女御の法かへるに法の
の法流せんともろ紙也　絵に紙染めるものか
法の古紀度に絵をも法しんあるにも御見まえん
て集しせ給ひて秘してたてまつる絵也
此法へいふまてかへし給をもたしうたうし行人はおもく
こゝろ給へるを権中納言の法くしくしたまふそわたした
まるかうつめれるをとらひまふあらうちにつくして御覧を

ことはりんせさせ給ふやまし　宮ゆう　花散里御方の活

御ふ人まてわらはせ給りんせ活つの物かしめすふとお

しこ給ふとや　細　梅枝の活ま也　案　物しむくハ権中納

そのんとひつり

いとめさましや　案　源氏の活ゑ也おまりるゝことのんや

こうひの活ゑともれ給ふるらしせんやうらし行ひく

案　源氏乃活ゑる乃絵乃るすとの給也

度ま斎乃花もおもしろきとおもひつゝもちゐる活けしとも

改めてを行ひく　度　細　二条院也

女君やまろこまゝみとめしきハそれくやえうちのへさ

せ給ふ　細　紫上也　案　と見りしきやを拾ひく旧との絵

ととも似へし

長恨哥の王昭君なるとやうなる絵ま拾ましろく哀なれと

河　楊貴妃ハ馬嵬(バグワイ)にてうしなはれ王昭君ハ夷狄(イテキ)にうつされたる

事なれバいまいましきなり　細　忌とある凡始めたる時に斟酌する也

いづれも不吉なる事也とやかくれてふるとはなひおもへ

とまりけるなり　案　是ハつまてもおもひ猶と忌む絵なれバ

今斎宮乃入内の始まいり給ふとの心也

其との心あれハ　尋　猶へたき折節なれバ也

こたみハなまりしきなり　細　このたびとひふ也　案　此度ハ斎宮乃始なれバ

なまりしきなり

ちからとゞめ給ふ　案　忌むと終し給也　度やハ二条院也

かの旅乃活日記のこともとりいでさせ給へとこの次いでてり

そ女君にも見せ奉り給ふ　細　須磨乃絵也

案　是度ふく左遷の間に日記乃やうにおそのし置る活

絵とものなる也

さしてこそ見ん人の心にもかなひ物かたりも見ん人の心を感せしむへき

なるへし　拝　一向さしてけたる人ならとも色なきなるへし

栄　源氏左遷の事をさしてかく見ん人のかなしとも見ぬあはれ

人を感情あらしむる也それを今見んといふは

おいて見れはそのおもむきをおもひやりてさまのことかなしむる也　源氏も

心ともなくさりつへしかれはあはれいとて候

紫上をも友まよひぬることも也

めくりて見んを待はるかなるらしきとそ雲の行ひまつ

細　紫上乃かなしき給也

独ありてなかめしよるは八海風をむかひ波たてそ見るへかりける

細　もろ海のまをみて女房をも見しらるゝ也ゑみ出されたるも八雲たく

かく積給へるまゝ物のあはれさをしる哀をかなしもの給ふまとも見ん

隔へつる也物ともし此時紫上をも白紙のやうにかき給し

よし幻の世には見んもはる也只と云源氏の事をしたまふと見んも給

へは此世を限給へと源氏も又紫上も給をとへかくし給也

抄　紫上へ渡と給とをもへたる也　栄　紫上乃文也源氏左遷の

時我ひとりはなかめんよる也八給とはかなくさらぬへかりし

物ともの幻也海風をみてよる也八須磨の事にして源氏の身の上

と給よりかへりことをかへり須磨乃巻にて紫上をも給をと

出かけし給とみへる也給ふ者早下りしてめ此の給ひ給ふへし

おかけりうちさへさはなかなかまし物ともの給ふにいと哀と思ほ

して　栄　此詞にても身にしみ見る也と給をとりさしてたゝ

さまん物ともの心なるへし

うれしめ見て恋おもてふまもなかりし如にうた時はまの

拝　波よるへさる也間のれ乃給也　細　一二句ハ須磨の名のうけたるは

とりて涙の間は此も間と波とをとりまかせる也けしき

にこそうるはしくきよらなれと也　源氏乃君也ちかころの世にもて
ゆゑ〳〵しくなまめかしく絵のかたにつくしたる世とゝなる
し也此絵つくしきとかれたるしるしにはせんとありけり
絵なりける源氏とはかくへる波まえへてきて此洞かたかなる也
湊縁はとよめる事をきのふの事とも知まさる表札柳か
夕附日さまや唐乃呉丸やまさりくもあるまし日暮風乃
哀とほかは残なくこゝろさめえしまれうちとも侍るまして
ようことをちかはしきこと也
中宮も乃見ものを見たまへる人さ物なり　宗　后雲居乃
御ことなりとの給ふ人もあれと也
かくさうとなるものしきこえてかはきさすかにうつくしくなまさ給ひや
うたよしさるともなりて絵かつかへてことのありし此家居そ
ませ給ふ中宮ものまねひしてこのまゝに見もとかなえともあけ

め乃源と申す絵にて権中納言は心をくはくしてもちくへし
御もえりかさるといふよくとくの絵見給ふ　かくことなるまゝしきさ
細　此中のみなもよれる紙様絵也繪合あるへきさ様なり
書出たるさ　宋　ほゝしてもなきともえるを出たまとの絵也
やうひの十日の程なれとをもうらくかなく人の心よろこひもの也
物おもしろきおりとなるに内わたりも　細　それなりとなる
色々ある時節也
ちかへきせちゑとも乃ひまなれはたゝかやう此事ともなく
清かるらしつゝ　正月乃節會ハ白馬四月の加茂祭
礼法ふ後ハつまくなる時分をいふへり
おのしきハ清涼しかもなる也ぬへく否　細　絵合此
くわるそ也　宋　絵を一段む寄もし結んつきをと
らしておもひきつ心ぬへし

まさんの法もつきてはとよまさとあつめさせらしせ給へり
孔 源かく思ほし也
こなたかなたにもゆ給ける物語絵ハこまやかになつかしさま
なるめる絵　こなたかなた　細 わさと度梅壺也まさりける
絵合の沙汰はこなたまさりける也
梅つほはいにしへの物語　細 秋好也　梅壺よまし
まお給ハめしゃ也
名高くゆへあるかきりを　細 高き絵とも也
これてん見てはいろふめつらしくおかしきかきりをとるを
つくも絵へれも　栄 権中納言乃法女こ紀度よまし見事ハ
めしゃ也
うちみえるめれ　細 當世乃絵なれハうちみえる所をかしく
目とまる也毎事めし物也

いまめかしき花やかさをいとちかう見えまさ給ひうへの女房
あそもかうしあはれさまを　いまめかしき　弄 実家なるよし也
されたうちみえる所ハまさる所様也
これたちかれをみるとさめあるとこれらのことにさためると
これたち是を　細 評しける也　これはのことにさためり
栄 もろとの詞也
中宮もまいらせ給へるころなれく　細 藤壺也
かたく法も、てうへにほかねれハ法わたく給ひ
とわたこなるまつはかんさて　中宮もすきさ給るゆへより
まち給也
此んとのおほくまろんもる絵さうめして左右わかちさせ
給る絵　花 絵合ハ二度あり始のハまへ梅壺の御かたにて
内の法絵又合られると後ハ法度なく梅壺女房と弘徽

殿の女御との御絵よ合給也　拜　左梅壺方右弘徽殿壇合
也勿論也花宴よりへきとへのも宮にもせむとありそれ
を趣してのる也絵合ハ二度也始のハ梅壺みくと花宴
よあり三月十日比也又壇也也　細　花則内にて絵合也
弘徽殿右ハ秋好太后紀殿也花右方を上にあり絵を左よ
て書へきと御説ありし花ハ三月十日比御前の絵
合也　箋　宮の絵合とたらしめ也と乃るへし
梅壺の御方ハ平内侍のすけ侍従の内侍少将の命婦
右ハ大弐乃内侍のすけ中将の命婦兵衛の命婦と
花　天徳哥合ニハ文家典侍掌侍命婦ある事ナル故
よ此合みと書例とらせるとよ
心みくさつらそくとまる心にかくそふくもつきとも也と
箋　当時の名人ある故に絵乃判ともある也

おもしろくおほしめして　箋　物語の出来の始也又此物乃始祖也
まつ物語のいてきはしめのおやなる竹取の翁にうつ
ほのとしかけをあはせてあらそふ　細　竹取翁　古物語也作者不知
竹取の物語　源順作　花　万葉十六に竹取翁のことありそれハ
物語にはあらす也　私書過せる也物語乃大意をいはく竹取
翁野山に竹をとるとてはるかなる中にまことなる竹一
すちありてこれを三寸計なる人いてきけるをやしなひ
三月計に人と成ほとなる人也成かゝやく清らなる事
世にならす屋の内くらき所なく光みちたり此子乃名
をなよ竹のかくや姫とつけてける世の男これをきゝめて
てはいせうをそへけれともかくや姫の心やすからぬは物を
又も詔りして法師さそへ乃得かくみるもりしはかりまつりんこと
をそむよ待てとも人しきにひく石はくらの法子みえ給

のこゑのうちを終へくらもちのみこは蓬莱の山
に銀を根とし金を茎とし白き玉を実としたる木
ありしまゝの枝を折てたまへ今独みそかにしにあ
あるは阿部のみむらしかの大伴乃大納言云みを龍の
くびなる五色のひかる玉を取て旅へとゆくへもしらずちりぬ
こそまくらをとられくまいるくまの枝作出て持ておはし
しまうたたくみらの枝はくまいる禄のことゝ語つげをと
てきそてうまへ其と記かくや姫うたうとものかたりてこと
禄えこともの紙にされたる玉の枝みそてたるむかしのかへ
しける大臣あへのかわりしはとろしれ終をいとけふへり
火鼠乃皮のひくをとこせしとておかしく金をとらせ給へ
たるとて見るかくや姫火に焼んとやをぞはしてつるに
とく思ひめくらして火の中にうちくべて焼にめらめらと焼

ぬきとれけるとは人なりしも云ことつくりまうけたる也五人の
まうとも皆しとをしたまひぬ　細　かくや姫の物語也一万葉に
若菜つむにはあゝは此物語みをあらはし六百番乃歌
合にもとあるも其あたる万葉に竹取也　竹取翁のことを
出たり　案竹取翁根本乃めつ昔竹取はくるとの翁とて
ありし翁竹をきりて作る器也其竹乃中に宿の巣
ありとて其巣の中にゑんあり彼翁あやしくおもひてみる
に天人乃形なる美女あるを翁か家にやしなひたるに珠
の天人也これをかくや姫と云其時の帝此姫をとらんとせ
しとあるに翁は歌姫を帝へ妻をこめしに富士の山
にあがりて登天したる也其時彼姫鏡を形見にお
きて侍る紙に書つけて歌を帝に捧げ其煙を富士乃煙と
なりけるよしいひ侍るとぞ又説に姫を帝へつかうまつる翁にとひ給

色んかやせぬなく成けるとて鮑(コヽロ)と云魚を焼て姫乃
まつ煙とせしは其魚を焼し人を葬送せしむなり
みつから放ちしとも其煙富士の煙と成しより今ひ侍より
あまり行つゝに常にあることわりしたゝめもする也それと
細 花鳥余情乃大意ハみなとせし先右の方より雖とく
此入侍り 栄 平内侍乃もとを仰侍乃内侍の将命下婦也たの
三人の才人わろき物語をほめてかゝる詞也常にはあさまれと
とき卑下の詞なるへし
かくや姫乃この世のにこりにもけかれすはるかにおもひのほ
れるちきりたかく 栄 はるかにおもひのほれるとは
[illegible]ならはなにをひのかゝるといふ富士へのつくる
とかへり
神よの事となめれハあさはかなる女 花 上代也 新 昔乃

事也云 富士乃むかしハいへる神代とも云 細 花鳥
上代とも云可然 花 此下詞皆左方より竹とりをのことをほ
めたてまつる詞也右方よりおとしたるはうつほの詞にや
めもおよはぬならんかし 新 左方の詞也左乃竹取のことを
ほめたてまつる也右方よりおとしめたるにあたるなるや
右 かくや姫乃のほりけん雲井ハけにおよはぬ事なれハ
たれもしりかたし 栄 彼姫をとらへしる詞也 位中納言也
此世のちきりハ竹乃中にむすひけれハくたれる人のことと
こそハ見ゆめれ 栄 天人とハいへとも竹乃中に生れたる程も
くたれる人と也
ひとつ家のうちハてらしけめとももゝしきのかしこき御光に
ハならはすなりにけり 新 内裏より後ましてるなれ
まさらぬ也 栄 竹取の家のひかりをともとも法の[illegible]

に乗りねハ云曲との詞也浅慮の浮名を立あるましぬと云り
あへのおほしかまたことゝ按ぐ云ひすゑ此ひかさとなき
えこるもいとあへなし　某 安倍ハ氏也おほしハ名字也
右すさましおもしろき詞也かくや姫ハ天人なれとも人ハ
ほりとて難義なるをしたと云て或ハ蓬莱の玉の枝
或ハ火鼠の皮又ハ燕の巣の中なるこやす貝なとを
とるさく求らん人にあらへしと思ひしによりて此安倍
のおほし渡唐の舟にあつらへて金銀をつくして求
させけれハくしき皮をえて姫に見せるに火にくへて
あやうかりし時焼さるゝ曲あり此心をとりしく
御とりしあるも　河 神異経曰南方ニ有大山長卅里晝
夜火風雨不滅火中ニ有鼠重百斤毛長三尺二寸為布
若不浄以火焼之則浄号ニ火浣布也云云十洲記曰火林
有大獣如鼠毛長三四寸取之以為布名火浣布ト有
垢汚唯以火焼布而良久出振之白如雪ト云云
花 東坡詩云　氷蚕不知寒火鼠不知暑
くらもちのみこの事と此ほうらいの事也心をもちりまた
らいのたまのえ　くらもちのみこ　貌主也此るの名臭
記之　哥　先をかくや姫の縁をそえつゝまるや天時
姫乃分にとのもとへ持る玉の枝をそえける
玉乃枝よこさほきとはせをくあるあやまちと也ある
某 右方よりも姫のまゆ文を絵のとうせいへり
絵ハこもの乃あやまちハ紀のはしめ紀のきゝもとらん　某 巨勢
相覧金岡子ニ云金岡寛平時人也子ならハ相覧也と
同時の人ハ如くし巨勢ハ氏也相覧ハ天暦まで存し人也
里　綱 昌泰二年二月除目親笑時平公讃岐守目従八

位下巨勢朝臣相覧畫所之是又同時の人なるへき也
かむやかミにからのきをはいしてあか紫乃へうしたんのち
くよのつねのよそひなり　かむやかミ　細　常ハ宿紙をいへと
是ハ只色紙也唐の綺ハうすくたるなるへし紙屋
かミより色紙と始まることも紀氏代也云々
からのきをはいして　唐綺也うすき物也紙にそへり
つきたる様をいへり紙にそへてはるといふ也かむや紙の事也
うつほのとしかけはけしき浪風におほれしらぬく
にはなたれしかと猶さしてゆきけるかたの心さしもかなひてつ
ひにはた人のみかとにもわか国にもありかたき才のほとを
ひろめ名をのこしけるふるき心をいふに絵のさまも
もろこしと日乃本とをとりならへて面白きことともなを
ならひなし　栄　うつほの物語は一巻にいとうしきをいひし紀

おのく十二三才乃時遣唐使にそへてもろこしへわたさるゝに
悪風にあひて波斯国へはなたれぬ彼国にて栴檀木あり
琴木の本に羅漢仙人なとを訪て遊ひ給ふにいたりぬ
その琴を秘曲とならひきりそ乃時としかけに琴
をはくまくあまた人へまゐりつゝの国よりも舟をはなちてく
出て帰るに俊蔭して秘曲乃徳にあふらぬ霜雪を降
らし天地をうこかしける後日本にかへりたる人なり此
ことも唐日本をとりならへ面白きものなりひろめたりとも
是様成へし
なをならひなしといふにおもしろきことかきたるへし
弄　右の方乃人たちをほめていふ也
きなる玉のちくなり　河　五色の玉あまた黄玉句論也
絵はつねのりてはみちかせなれハいまめかしうをかしけに目

かゝやくまて見ゆ　宗　左絵ハ飛鳥部常則天暦の
の絵師也木工頭小野道風延喜朱雀時代の人也宗花抄
八屛風ともハ宮のめつらしきものともをかきて奉る風なる八
志をさしゆきさうしをかれたる　細　当時の絵師也宗花抄
絵屛風をたてられたる心にも仰つけらるゝ也　孫　あまへ延喜
朱雀時代の人也

右ハ色ゝのゝとりのとおもしろき　細　右の方まさる也　孫　右方絆
ありて右勝なるへし

つきに伊勢物語に正三位をあはせて又さためやらす
これも右ハおもしろくにきはゝしく内わたりよりうちはし
め近きよのありさまをかきたるハおかしう見ところまさ
る　宗　伊勢物語ハ左梅壺也正三位ハ右弘徽殿方
也伊勢物語ハ業平のことを絵にかけり正三位物語絶てなき三

位の息女兵衛大君といひしありける人なるにこまたに
ハすひてけふのめしに参りたる也紙絵まかる也是も
右ハ面白きのん成へし　孫　此物語当代なれハ（正三位）

平内侍　細　左の方人也
伊勢の海のふかき心をたとらすてふりにし跡と波やけつへき
細　とやうのことにみるまてをそて八ふかき絵物語ハ浅まゝしきこの
とも　宗　平内侍歌也伊勢物語の奥儀をハえしらてふ
りたる跡といひさけとも波とハ海といへるに對してよめる
なるへし

よのつねのあたことのひきつくろひかされるにおされてな
りひらか名をやくたすへきとあらそひかねたり　宗　正三位
の物語にかされたるをひきつくろひかさりと見えたし
ても在五中将とされたる業平か名をやくたさんと也

すまうまいりて　花　正三位此物語をこの世ふ伝へられは
右のおとゝ　花　右おとゝの大武乃内侍なとゝ也
雲林院にこもりの御時承心ふとくて給ふ事をもまれなりける
宗　太武内侍をさす也右おとゝ也正三位乃息女伊勢へまかりし人
のうへよりまゐりし伊勢の海の子息をもちてまかり下りみるといへり
正三位乃物語をかきて此成へし在原太君をも此物語乃中
にある人成へし雲乃上ふかくきこゆるなるへきや也のの
座ハ伊勢の海をと云也
在原の太君乃心さしさまを帯ふ書きてかくされと　頭　藤原也
乃詞也兄をも物語にある人乃なりける人へし太君ハ業平乃
人のみ也や河おもて肴　宗　主氏をも太君也ハ云也これ女中
宮乃御批判也下の御心右すまんのひく故に号ふをも不心
ありしきりと

まこと中将乃西殿ハえこそ存しとの給ひきて　河　ま御葉
平親王四品阿保親王第五男也仍号在五中将母伊
豆内親王也　細　藤雲孫と定家也
こや　細　藤雲也
見るめこそうちみりぬるめ年経ぬハ世なの海士は見るとや　河　めん
宗　藤雲を女院乃位弥也伊勢物語ハみるめこそ中宮を云かとも
伊勢の成た在河めん乃字也名をやさ河めん也緒の檢祢
ハ不成乃わなを此家も右乃様に見へられとも中宮乃御批
判にそれを云河めし也読つる故に右のまた人ことなく
に右の様にさうに成へし　頭　藤雲左を様と定家也
花　うちまりぬるめハ心に見ん不可也云事は極無りと森家
みゑ年久しく伊勢にまししく常なれとさて伊勢物語
をかこしかくし給様にさとたちまちかくすうるを常る

細
此哥ハ梅壺乃御方より花なるよし思ひやりて梅壺
ハ参り給ふまし給はて祖母の給ふまし給ふものから
雲の上の哥成へしと尼のくましまうす故に伊勢乃
海士とも読給へるなり
くやしの女とかくかりつるものかはとおもへるに
栄 女房乃剃ぬるをみるかひなしとなり
一まつ紀のことのはを隠しておもひやりつれ
旅なる人とも八 弄 結句の詞なり肝要なりあしたにかも伊勢物
語に三位より後に斎宮の女房乃ものなり但此説如何可尋
ここ八内え給ふ絵合なり一書にはこまかなるをはかりしを八伊勢物
三位とはこまかなるをはかりしをかへしぬとのみなり伊勢物語に三位
よりも後の心をいへるは宮なるや 細 結句の心も肝要
とあるなり宮こハ内ゑ乃合なり 弄 花乃説如何可尋之

さてまて八内ゑ乃絵合なり
あるかなき世ゆかしかれと あなかちなれ共之はかるなるなり
うれのも宮乃もかさりしとかくにえん乃ほいとなるうへあさきを
給ふ中にいくらかくとあるにあはれひさうかく心え
へらとも打くし物語して打なれたる八 細 内のと斎宮とを
るすの花なるにいさよ絵合八斎宮と内ゑと 弄 此詞にて
ことよ乃と姫君のと宮ゑなるよし 花ゑにあり是八無之の絵
のなりも此詞はなくふたく内の御絵と梅壺乃御絵とあはせ
給ふしの給へり如何宗祇説八弘徽殿の絵合とも梅壺と
弘徽殿と合給成へし宮乃詞八無之して此絵乃ことゝも御
もなる詞成へし女房のひ見合とのみなり
清和みくかちまち宮さめんかよの給ひむすりぬ 古宋物合様 弄
貞常例也永禄六年内裏根合部写心院殿御歌合寛

子皇后宮扇合上東門院菊合六条内親王絵合あり
後拾遺集に禖子内親王絵合し侍りけるによみ
侍りける
凡後世ハ後の事をしるしをきてあり卯花さきたる玉川乃里
細 主上乃御方にも天徳歌合を模せらる 孟 源の御後見意也
御方の御前にもかくとも其上二中宮の風流成へし
かく後二ともりやめたくねたく思召しけれハ中宮にもあとあるへかり
とめ給へるに 栄 源氏の申しなされたく絵合やおかんと覚
悟し給て中宮にも縁ある絵を奉りしてある絵也内建
まつ御方の二事ハ此出し給ふ也其心ハ此時よ太子
又院にも左遷のうき事をおもひせんとの心頼に
まゐらし此二事のかハ御目をよおもひとらるまきさ給ふ
あり事を中納言もその御心をとくる此ころの世にあり

かくやりしかき 細 左遷の愁をもおもひ給へかへしに
うこゑをとりのかへる紙あゆ乃ちかいとちろこゝろを
孟 昔ハきよくよきる紙今乃世にハ唐紙よ心を紙絵を遊
細 昔ハ多く紙に書也紙絵ハ稀成也 栄 今乃世にハ唐紙
絵を奔走せし也
いかあるさめかんるを聞つるにとありきてありなん
きこゆるとてそ世の絵へと 細 源のよめう乃絵也と新よ
くさを多る曲ともなれとも 栄 おもしろくむかしのりとハ
あるくさるとてあるにとあまきんと源氏を初そめハ
かうきことの給ふ事よ地成へし
中納言ハ人にもわりきて 栄 てをかへる為し
まつきたる紀宗をあまきてかくを給ふかる紙 栄 人乃出入るに
窓ふくかくしてある栢まや

院にもかくと聞て　細　朱雀院也秋好を御かしづきたまふゆゑにや
きこしめしつけて梅壺に御絵ども奉らせ給へり
梅つぼ　細　秋好也
年のうちの節會どもおもしろく興あるを昔
の上手どもとりどりにかけるに　栄　昔ハ年中行事絵
を日記のやうに絵にかきてめでたく御心にしるし也
延喜の御てづから事の心かゝせ給へるに　細　桐壺帝を
延喜帝になぞらへたる也題號也　弄　同　されど次ふ
我御世とあり
又我御世の事もかゝせ給へる巻に　花　是ハ朱雀院の御
御世の事なるを桐壺の帝のかゝせ給へる絵にかきそへ
給ひしと云也　細　朱雀院の御代也　栄　花に不同
かの斎宮のくだり給ひし日の大極殿のいかめしきに御心
しみておぼしけれバかくべきやうくはしく仰せられて
花　斎宮の御下向の時大極殿にて御幸ありて別れの
をし給ふ故斎宮の御絵にさし給ふ也梅壺の斎宮に
御下向の儀式朱雀院の御心にしみておぼしめされし
公茂がつかうまつれるがいといみじきを奉らせ給へる也　御絵乃作者河
大極殿にて西向白河院に不及かくて先侍りき
さんりちはうまりかはるらんとおぼしてきぬをそへ奉らせ給へり
細　公茂也絵所金岡が孫云々　河　宋女云巨勢金岡孫公忠
子也　栄　金岡二男也　絵師也
えんにすきたるぢんのはこにおなじき心ばのさまなど
いまめかし　花　艶に透たる沈の箱とハ沈のすきと透ける
箱よりある事なりや又沈とこりをりあしたる箱と知べし
きよやうにつくりめかしき河海に心葉ハこゝろさしたる梅を

しをりぬしるされたるところ迄も不可説のさまにみえくちらし
御絵乃枝を沈乃箱によそへられたるなるへくてそある
旧
めかしくしき御の心はへをもみなあはれしるへし也
花なる女御ありけるをとりしたる御乃説用之
法せられこゝをそふてともにく　細　又いまなき也　弄　御こ
とはにてうるとそ也
院の殿上にさふらふ左近中将を御使にてありかの大く
殿乃御こしよせたるところ乃　弄　禁中をも又院をも殿上
とまうすへし　細　院乃昇殿を極むるものなり也
かうくしきに　神くしき也　弄　斎宮伊勢へ下り給ひし時の
御輿を大極殿によせたる所を絵にかきたる成
詞書をあそはして付る也
身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちをわすれしもせす

細　院の御製也あはれなる御歌也とてそあれまて昔乃大極殿
乃儀式は忘給はぬと也　弄　身こそかくしめのほかなれと斎
宮の女御をかうりかしこき給へとも院の御心よ斎宮乃御
入内を恨み給ふ思食たる心なるへしされともそのうちに
御心のうちをはたしたまはぬとの御心也
神よのこともいまそこひしき絵はいかくんといひかへして常なるきはれいかゝし
き斎宮のしめのうち　弄　斎宮乃御返事なりともあはれ
なれた也
昔乃御くしあけのくゆへあるさまにあらためて　花　楊貴妃乃死む
さしを半句りて方士にさつけて為我謝太上皇とい
舊物を表し深情を得り朱雀院をも今太上皇とみて
ましぬきて也　弄　髪乃具ともしかて也幻の鈿合と
使ひしによそへ貴妃の其ためにて絵給ふ時朱雀院乃恋給

しき事を思出て昔のかひなしと云り花なるまゝなるせちと
細 花なるむかし真名を味也
花 しめのうちハ昔にあらぬ心ちして神代のことも今そこひしき
内の住するをも昔のやうにあらぬ様に秋宮みつからの上に
附てなけゝき心也院の御方ハしめのうちと有を思さ
ちゝへ志めのうちハ潔斎へり 細 朱雀院の御在位
の時の秋宮みつから斎宮に時代要しきのかたしも 弄 秋宮女
御在位の也しめのうちとハ禁中也とも昔よりあらぬと
ハ朱雀院の在位をさるを詔るをと云り昔の御世ハともにあ
しきと含轢を潔斎へり神代のことくなるかしとかり
也しめのうちとあるにかゝるへり
也て花に残りしるにはつきて年う世移ちはつりひの移く
ちとハとゑまめしく院乃みゆを御須ともさるにくさるをあく哀

とおほしをかえ 弄 朱雀院秋宮を御須ともかなる也
あかしく世をとらるゝよへさまかしくおほしめさる 孟 朱雀院秋
御世あつしハとおもほへし 弄 在位とあゝる後悔也
おもふをもほとしと思ひ出のしさを給へるんし 細 帝子の詠
の辞也ほまゐるをとへり 弄 秋宮入内在位朱雀院の
源氏をはくるをおほしめさんと也るとつしるの御むらひ
乃とかた選給むらひまやと帝子乃地の詞ヨ批判したるとみ給
るにしるの御むらひまやあらん 拾 帝子詞也ほさのうた
めまつしるゝ也 孟同
院の御絵ハ后の宮よりも伝さるりてかの女御の御かたにもれ
ほくまゐへし 悪后よりも伝るともかの女御とハことの弘
徽殿の女御也此ハ弘徽殿の御かたより四君腹の女御成へし
中将の息女今ハ権中納言と云也悪后ためハめの女御也され

左御絵ともたてまつりたまへし 祖父ハ二条太政大臣也 細 故弘
徽殿の大后より宮権中納言なすの女御の御かたへも侍りける
内侍督君もさやうの物このましき人にてよきをえりて描かせ
きさいの宮にとりてまゐらせつゝあり何れも絵かきとも
みなまたしけれは人々とのゝつくらせ侍りし也 細 朧月夜也女御の妹なる 栄 朧月夜も
絵をも好給ふ也
その日とさためてにはかなるやうなれとをかしきさまにはかなく
あらためて 栄 初度の絵合ハ三月十日比也此度ハ三月
廿日比と見えたり宮御絵方をも女房方よりも出させ給ふをも
らるへし
左右の御絵とも参らせ給ふ
西むきにて右ハ北にさし南也 細 左ハ梅壺右ハ弘徽殿也
女房のさふらひにおましよそひて北みなみかたかたわかれ

まてさふらふ殿上人ハこうらうてんのすのこにとの〳〵心よ
せられきさふらふ 栄 女房の侍ふひとたま大内の台盤所と云
也清涼殿の西の廂也 おまへによそほひてとハ宮の御座
をかまへたる也此絵合ハ天徳四年三月廿日内裏
歌合を模してかれたる也清涼殿の西の廂にて此事
有台盤所に立御倚子を南第四間に為左方女房座に二
間為右方座に後殿南に為繧繝端畳に為公卿座に清涼殿簀
子為侍臣座西宮記にみえたり又花鳥同
女房の侍ふへきところハ台盤所也上局座也後涼殿と後
殿の西也 細 台盤所也後涼殿とハ台盤所の西也
後涼殿とハ清涼殿の西也絵合の席も清涼殿の西廂
みえたり 桐壺巻
左ハしたんのはこにすはうのけそくしきものにはむらさきちの

くろのふしきうちしきをまふひろめ乃かしれさきあり
河 花足ハ机乃足也蕨手の形也きぬ褥ハ地赤也
宋 左方乃繪ハ紫檀乃台よいへく蘇芳乃木かくはく主原
花足よきとへ又下はくへきへしを赤褥ハ紫丸くるの紋也
うち敷ハ浅く色ともとへ赤る地しきや又まは蒲陶染乃う
ら乃綺也天浪の斉合も左方洲浜(スハマ)紫檀(シタン)机蘇芳下机
紫乃綺地赤き花よ同 細 たえうち敷ともうきて左方に
下はくへと打ちて左上の赤褥ふ紫乃くろ錦とうきく
うまに又はくへと赤くゐく紫檀の箱よ絵ともへく赤も又右
かきうちしきに葉あとちの二藤乃紋也そらもふて下
机乃上丸きき褥ともいに見へ文章丸あやに略して加くき原
あり左右とりふとをやうをおそし褥所へし又天浪が
合よ基相ゆるも又うち敷ハそひ染のくしれきとあり云

赤褥乃ふかよ地ハ赤也
ほとハ六人あそびに桜かさねのかさねをいこめへく緋が井に
菊かさねの打衣を掲るりもとりてうらゐるとちすへてくあかしに
みゆ 宋 繪をとも丸あゆふ童女也天浪乃舞合柳童女色四
人として舁(カク)文臺(ダイ)をと 細 わらハも六人とハ雑役を勤さへさ
衵也 弄ひとくハ六人也ハ此時繪ゆるとも丸きてうしへさ衵[illegible]
又袴表衣かさねをきそ童女乃うへはきたる衵也水干乃ゑ
のやうなるを衵也あつく色ぬうちにハ桜乃衵の加さねく
赤き井ありちのうさにハみする衵也あこめハ二つとも三つともかさぬ
る衵也袴かさねハ面うに紫裏萌黄をいふ也
右ハらんのたうにせんへうろ乃きつきはく柔うちしきハあをどちの
二藤紋あしきあしゆハ乃くとく花そく此地のへるといつるめう
し 宋 右方の絵ハ沈のまとに入る花をくハ[illegible]めてしる[illegible]

せしきたるやうに見えて何の木ともなくしげくしげるやハ見えし
もせんかうを沈乃あさ木と云下机をも作まうらす也
下机にたて寄る地しきまた地の青海のすかしもあるやあしゆいかく
ここを花足とうしくここなるかたを云すや河海すハことく是
系すて結ぬるやうしまうるされさ申ともおほつかなし天瀝乃
洲浜に沈の浅香センカウを用たるなりこれハあさきたるなきなり
足ハ青地乃錦也新しくわれたる也天瀝方合右方洲浜沈の
机浅香下机浅標浮文織物モンノヲリ地敷となく蘇芳の脚花足同之
蘇芳乃脚も左ハ唐右ハ高麗也そのほかとりて宮ならも左
ハ唐乃錦右ハ高麗錦也　河あしゆいのくミハかくれぶり
てさすかるにわきひしすひと結く机乃四の足をとうしくて
花足ならすもあらく打をへするる也下濃也　細足ゆいのくミ
とをくミくく花足をとうしり見てる也

わらぎあをと冬乃柳乃かさろん山吹かさねのあこめこそかくまと
宋　あををとハかうもやまて紫にあく打しもるる也一枚あをとにと
はりあをとハ表ハ白花十上き下ハ黄乃まよりをとなる也
柳をそ面こほろく裏あ紙をとひ黄ハ御花をとこる也山吹の
きぬのあこめ也ハ面うさてくちそ裏をさるるとハ花山吹
と云面黄キに裏紅なる紙をもうる山吹と云新花御説同之
細　あをと萌木モヘキに黄のまてつてたるも花あをとみて柳乃うき
ミ紫ハ紅をとのうらに又柳乃うすく紅梅をも花絶をとこと
織物河海に云左のわしとあるの色右を青色ハ錦乃装
束にかいさうるせんうしと象ちしき左ハかうのき右まろにて
まの錦と見えるとき是又左ハ唐楽右ハ高麗楽にかさ
とるまうや
みな女のへにまろ也花なき前　弦乃音机るをとをうし花まくへ人心ちる

さ候なり

よ色乃女房ともまへにさふらふ人々きりをさためあへりて
うちの御まへ梅壺中納言かたの絵　花 うへ乃女房とハ典侍掌
侍也まへハ左方まへハ右と云是とも乃色ま々女のさ
ぬ方さきあるかや　細 まへハ左方の人ハ右也 弄 左細あ良し
その日そちの宮とも参り給へりけとうしあるまてをかしきあり
此絵ともちん名にて名々のこの給へも　そちの宮　細 帥乃宮也
絵とももてき給ひへ此乃此とくなくあめりて此絵乃判
者とまち給也　宋 源氏乃舎弟也
物とくの乃まてたまへるめ絵ともつやあしんとくしきめしかを
あしてあさましくひ給をお目せしとおもちて御前にまいり
絵とも此ちんさはうまつりを出しなくいとくし
あまた心ともあらそはしこえさめ給ひ給なり　此所実判者

よ竹紙乃つし肉く彼卿調ゝや也
むかしの事きのあたらしき内への上にはとも此物かたりきこしめしけとも
えらひつる筆とそこにはきてくれなしあるにかまえととおもへん
くるれしやまんるに　宋 月次の絵又ハ屏風なれ絵のうや
紙絵ゑは限あるとて山水のゆきくれる所まへかんをはくさぬ描なと
まさも　花 紙をとつきて手されもきぬのやうかともあくうきまと
かんかくきぬ山水のつきなひとかんをはくきぬゆゑ也上の紺
此中納言もろれ心ねかくは此は世みんなくかくなめる
きりこゑをはなへそのかるのはとあまた紙絵を弘徽
殿の御絵とまうすや　細 絵ハむかしうるまをし紙ハかんかり紀
故よ云の人ゆる限まそてさとこそやそひやらるゝ前のなしと也
筆もろのさるさい人の心よはくりそそてられて心との心あさきもちかる
もと　宋 筆乃のつきをひなく人乃心よわまれされあんさくる此く

くやしの心也

昔乃あと〳〵ちゝたくみにかくし思ひあはせらるゝと見え侍る

あとなきをきゝてかくは此あそひを〳〵も各〳〵すこしかくさくり

あらはるゝ方ちかゝるへし　花　紙絵は山水乃ゆきくれたる絵を見るを

はくちのひとつも上下手の中なるは筆乃いきをひにて上の

ほさちかあつても昔の絵はつくゝたちぬるとや　細　不恥上古

也　弄　此事花よくかし此翁のの常此理也見るへしく

あさくれいのことかりしあきらく中宮も御わたりまゐせも

花　絵合事乃為此障子とおもきて清涼をとくるへし

細　花鏡西乃障子とらく絵ともを東面へしそのの前は弘徽殿

と清涼殿とのあきひさすへし　宋　基盤弥へらんかに

あまり　中宮　細　藤壺也　くやうの絵ともの物さうく

参らへる女氏さうらしきとや

あらためてめづらしきふしも思ふにはおとるまじきにおほえ

ほさまにて源氏の方のちんとも心もとなき絵ともなとに　宋　中宮ハ

絵乃勝(スヒシ)負事くましきとハ源氏の御方にはあしきと也

時〳〵にほとへ絵ともの御とおもしろまかりけるさためかたく思ゆる

ゆるね　宋　源氏も判者たるへき人なれは絵に細也

左右ともに絵かきて心とめあるなれは左右の海乃まう絵ハそこさきたまへるに

中納言の源氏さまの絵は当時をおもひくらふるも心してまさりての思ひを

きゝ心としにまされるもとゝえらせとさえをかへるに　哥合負(カヘ)

梅(サニ)とそてたらむもを天徳哥合に今銀の枝を洲浜にたてゝ

くすさしの事へはとて花乃枝をくし数をとゝまるつまや

宋　宴ことハたちて一番の勝也と一番なるへき時は源氏乃絵

出るも

くらへらるゝ錦の上にも此　宋　源氏乃御絵をほめて云り

心のうちなるをひきうつして云かひなくかなしき所なとかきまし
かなるへし　細　源乃思ひやりて云給也
みなうちしめりてあはれなる事ともかきなし給へは　宗　蛍兵部卿御判者
こゝ判者也
そのまゝにむかへるにも猶まさりし所とする事ともあり
其ありさま海浦ふしきの心にかきなしたる事とも哀なる事とものやうは
おもしろき所のをりふしのあはれなるきはまりなく機のうちにはなれかたき所にあら
すと給へり　宗　左遷の時も今の程りとかく哀なる也
須磨の浦のさまをもさまにかきたまひて
宗　其浦の絵の中は左右ともみるへし但須磨の文字也
まかのうらしき日記にもあらて哀なる所ある所也まし
建保　河海ともしき日記にはあらぬ也　宗　是をかしくなり
きなり

見る人ゆゝしきまて事かなしく須磨の絵の巻を
これはみなうつりそて哀なりけり　宗　是なりけり
あらしもゆゝしき歟也
ふかき心をしのひて　宗　畢竟（ヒツキヤウ）さるこゝろは絵の様とみえし也
須磨の絵とちはなれぬ　花　天徳哥合左勝数九とく
秋おもむきをかきつくしたる絹まきとのいとおもしろく物語されてさ
くちきたる所の詞にて後の物語ともいひてきまて
宗　蛍兵部卿宮は源氏のしなまき給へし
いまはかく須磨なとかくはまことにこゝろをとゝめて御覧しけるにそ
しきみなつきぬなるとやうたかひなし　細　源乃詞
後の絵きはしかし　細　桐壺の帝也　花　前後源乃詞也
さいつころ世にいとおもしろきわれはやあはれにさ
みなさかりぬる人の命也さかえいてきたるはいとかなしき

物よみん

論語曰有顔回者好学不遷怒不弐過不幸短命死矣

今也則亡未聞好学者也 史記曰顔回一箪食一瓢飲不

幸短命ニテ死矣 仲尼弟子伝 仲尼トハ孔子ノ字也 子思ノ伝ヲ後ニ記シタル物也

一箪食とハ草子のやうなるうつはものにもりたる物を食とへて

聞さる也 一瓢乃飲とはひやうたんなとにいれたるのめる

物也 以上顔回か学文を心にかけてこのミたまひしといへる

ためしなとをひきて白氏文集云文人数奇詩人薄命数

奇とハ文人ハ才あるにしたかひて身のやつれたる也

薄命なる中にも詩人ハ文学をたしなむによりて命みしかし

とそ也 此段の詞は命ときハひとをとらへたるはかなき

ものなれは出たるに 細 命也幸とハ顔回なとの類也

あはれなるかなしきによりて人のおもふものをしらぬあるへき

ちかことの為にあつまりてひろくしるされたるものにて

花 思さる人乃文学をむねとしてのことなり玄人はおとこ也まかせそのよし

深きなるひそ命也されはたとへは姑をとハいひとかかくさ

まほうもの時なれはあかりてかんのうきのかうつしとして見るもの

にさのことはなかうれはきかれとともなく文をかくされたること

ともなかりしか絵はとをきこえてこのましく思てこゝろにかなひしや

うるはしくあやしき源氏のとかくにかけたるをほめつるよしを

ほんさいのかたく此物語へさせたまひしに 細 天下をあつかり

まつへきかたちよく数奇也 案 政道の文を云ふものなり

あり様をみてかなふ事に侍るはかなきと云源

氏卑下の詞也

はかなきことゝもあまたのよろこひとてことに心うたかはしき事

らきうきことくるものゝあはれをしるへきものをかく

てうんむゆくちろもとく給へくるへきやとて打つもく侍りしと
律よるれるすもちて　細　つくらぬ事をもちすれとも
哉頂く女か行はありてもとの海乃かうれ也と見つくは哉くに
思ひよらぬ心法なく　細　法よ乃ようろひ乃事也
ようれしうと筆ものゆくりさまありて　栄よく上手なる方
との詞也
色よりは公事とゆりは南んとよ路つく精しとはりて大かく南法
流んせ乃もとへきるすくぬた　栄色頂とみは筆もみてかく其後とも
かうもとれくしきやうなる旗乃ぬこやあくんとみこには絵
色た　栄物もれなるやうに人乃おりなむとも
なすみ乃もくとも　細　師の宮乃詞　栄参議宮のみこれ源は哲
詞也
色よりもものたちなかく南へきかさなくぬと　栄高んとた

八なられてとの色也
みなくは物乃師ありまとむ法ゆへんなとのありさまある
へきらぬと　栄師道ありてとのつくうれ色とういまた臨
さあくんとも
とあつくういさんに法とありぬ色て　細　続尾法師流を
物なれたまなひ路へきかや也
筆とるみちかや碁うつすかやハおやしきを到るの道とみる
事とみるれうらなくみかるとき道物とわるへきみなく
細　絵かく手師も不備不為るとも少なき路はなくかや色
番真あるものなくらまなくするわきとゆへもとき物ハお
ろうなる物也　愚(ヲロカ)なるやうなる人もさせ給へくまくた
冰力さ也　栄此女道ハとくへみもようぬ物うとも也され
さ其人の鬼(ヲニ)とゆるか也らうなくみなるかハ苦労(クラウ)し却

を入ぬとの外也とを連ねとをよろづあるの人乃まをもって
碁ハ東坡三不能乃一にいへる事也三不能とハ碁と酒と
うたひを此三を東坡ハ得ざるとのこと也 孫 とを連ねとを云ハ
琵琶箏の功あると見えと
うきうけうたひを出されと 宋 筆と碁と也
家のこれ中ゆを 細 公より紀家乃人なり也 宋 高紀家の人氏
中ゆをも好きたる人を読にとえらるゝ也源氏乃事と
の給へり
賤人とぬをぬる人のかをかるをもこれ見てあるやうそみえる
細 源をはしてもいへり天然読るに器量（キリヤウ）きとをいへり
院乃御前ゆかく見ゆるも内教王乃川をるも伝まぐとるを
とりわけ伝へもあらんさまを給ハ伝ゆをぞんそのありなもとあるにた
てあるゆかるゝられて伝へ人をまをとるきを給へるうひあるなるべく

宋 稲恵の御物乃事也是見んとも絵をも学文志給中
にとるよりは給へく源氏乃傳とさるを給ふ也
文さいを伝る物ゆくいそ伝くるまなれに相と読るを給ふ
事あらん一のはかゆへはつきのさをいへ伝るれなとをあらむつき
くまあらひ給へる也 花 文才ハ其上の藝能なれハ中々云
に及ぬ管絃乃たまゆきまゐるあんいと有難き
事也源氏の読る諸藝とさりあ給ことをいふ 源語の一世に
源氏ホクヘンに追大臣信公の例をもって（三五下）いへる也云々 細 是中
也ハ連枝ありくましき中に源融あるを出する也此御
の宮をも連枝也をひかるを定まる文才とも貴人にして次に
管絃をとらり礼楽乃道をもいへる也ケ様に読るの道
ある人を北追左大臣信公乃事を下に更にありまさしき
きとをはくゆかしきる也

うへも相かしの給ひきこゆるの人しらぬひめのしさをいふ也絵ハ
あまとおもて乃はかなにに　うへ　宗 桐壺の御乃御事也
ちとさひさを行わるす也そえ思ひ給へしらるとうきのさま
きまかく心すへ乃もとつ紀のふもてとも　宗 源氏ハ御心と
きく筆のもとさひと云ひしふと也
路とくらうちすハ絵あるはかりてきしうぬわさなりと
うちきられ女中にて云ひなれまや御の御ことききこし八
て　宗 曲もちかくありさるやの詞也此段皆帥乃詞也
うちきられ行ぬ　宗 其身にも源氏とも思ふなり紀行也
廿日あまり乃月はしらえ女　細 前の絵合八十日後也
こちらさハまことさやうなるねとおほえるのそらうしさかと
あまりに　花 御座の花もさきなるにまさく廿日の月さしこれ
細 男へはらぬなし也　宗 御座ハ清涼殿なる人し

細 臺盤所ハ出むきさなれる也
婦人のほうきれ御ことめしいて　花 李部王記承平四年
新嘗會勅召書司令稱唯仰云御事奈良之方為礼
書司即取和琴置之御前ことに楽物合の後よ
ハ必御遊あり書司ハ女官乃名也和琴をはうさと申より
て和琴をもやうてあんのほうさいふ也行女ハ宮女の法師
なつかひ申る和琴也宮女の法師とその琵琶乃る也稱
唯とハかしこまりたるとの心也　弄 書司女之官也和琴と
あつかる也云とさん和琴をはうさとるよの楽器のなき
怪よりとハ一勤　細 女官也和琴をなと弾く人也
またん権中納言を行わり絵さハ心へとんてはもりあかり紀を
て行つりかくとはらの御ことも知とくさんひそくおね命婦つうう
まつる　細 源一人乃やうにいへとも此中納言も源氏よとらう

さる人となり　栄　源おゝくの絵とハいへとも中納言も上手なる也
う人の中にもすくれたる我めして　細　あたに御心の人の中也
ありし紛れにはたりしかハうちとけてはたちまちて花のことも
人のほうもちとも心のくにのたてて事の言人はつるなと
花　清遊に伝ふるをうちふ人柏子をとるや助音まゐる我ハ付
哥をとかり又は哥合絵以有御遊雅伝親の柏子のほう
召人ホラ作コウス之　栄　柏子とよむへし
此ちゆきめて主記紙の風をまゐれり　栄　人々絵日記を又家の
慰めとみなしかり
絵くともハ中宮の御方よりさまたくへの入れ給ひて申さへ又かき
給ふ紛ひなきなり　弄　又いさねてとハ別の絵をとりかへ給ひ
細　みてハ清るや八今日の判者あるならむ也　花　御宮絵の判
抄　しこ給ふにはよるまてある絵を絵也　抄　中宮ハ藤壺也

それはたとえみへき此絵のほとめとし給ふ　栄　此絵合のころ
のことを世中に御法もとめる也
かくうくみまつたを中宮よ伝へかしもを紛へとかくて絵ひとまこ
ことはこれらなれしめ　或本に中宮によりすく姫とあるを理
不可然也河海にのせを紛へり思案を見よおもふしるに
姫ハ治る事の事にて八月の絵合源氏の君札まゐりしを給へ
まてし中宮より清りて姫へき山かれなりて又上の詞に中宮
まゐるにこそ力をなまりへきなりなき物也なりとかまへて一様ふて
さまするにうつくの主様さやうに力人をあるべきりを紛也
あまてし中宮へまかりせをとられまとやさを給へるに前
尾桐叶以へし此次の詞にこれかうしめ文殊のまのはく
ゆしうつせ給とあり見ゆ始をこをとめの後事のふ花絵
ねるまや気まつるそほくみしを給ひてしかしめかする

御かた〳〵中宮は御かた〳〵を絵へとは源氏方の絵なるへし
細 藤壺へまいりし絵也
まさのうちれけれくゆかしうしを絵へと　細 御源氏せしまた
なき絵とや
今つきくにと中宮も御心も絵上　宋 次第々くに清める方かきんとや
うへふを御心ゆるを絵ておほしめしたる　細 主上も無心
中宮と中宮もとや御心の絵は移る方とも詞也
うまもしく方人も絵　細 天暦かろうしきや源氏れとも御後すも
ちかれきことにつきてもさうまてなすしなのも絵へ
是御中宮の絵なるとに御へん源の御光しく絵との心也
権中納言は絵おほしとも御方へきりやと心やましうおほさ
御へかあるは心のやうさも弘徽殿のあるよと云へり　弘徽殿方
梅壺と云ふも梅壺はおさまうて絵で意とあしらうか絵心

あらかはへし
うへのは心むさしさをもとよりおほしたるにえれる程こまや
くにおほしめしたる御さまを人ちまたよ御かしきまりたるを絵に
こめかとのもしさるまとも也おほされたる　宋 御つとこ
き殿への御志をさ由うに云さてさるを此中納言も
人ちまたよ見絵へは御かたらに云絵をあへきとはあらし
也めのそしくと絵あるも
御かたへさせちるとふとも此御時よりもすゑの人のひいて
御へさまれとそるんをおほしわくてさ殿のうちちかくれき
御あそひをあつしさもちふせさを絵ておもしき御かたとの
御世なりり　細 延喜天暦と云ことくに冷泉院をは天暦に
御して御おほいそまんともやなるこをとかとして文道
のなりも也　宋 此御つ冷泉院をも天暦は御しさま

されハ実なるかれ節会なるとも後代乃例になりなんやうに
とおもふかひ給ハさりし御心ハみなれきこゆれハそのひとまた
しるさせ給風流の事めしおもひ引つへき治代とも又絵合の
例よひまゐらせ天徳乃歌合も此治代のことにも世乃ことくさに
も延喜天暦乃聖代とおもひなりしことなり
おほくの御代ハよみかへたる紀にも世をおほしてそ今をとうしおほとの
ひおもひしまひんと見んかまりてなるとせをとりもさきなる世とおもふ
きこゆることにて人のめる　おほく　細　源也体退すへきとなり
とおもふことも清成人のおもへてとなりけり也　栄　源氏世とう
むかし給ひんとんとなり給へと御つのとまこし　を
とありし御ゆかりまてその治世也源氏ハ此時内大臣にてまし
しまし給ひゆへにいよいよ世をおほくなる中也此治世献なると
中給へる名をともなれとも世といひ給ひんの御寄特也

昔の御ゆめしと見んことくみをとよせたまひゆゑして源氏にて升たく
くの御ことをせにぬきをぬる人のなかくこゝろとさぬわさなりを
見　紹　源の名のるの時なるをとくへりかん給ふ也　栄　源氏の我
治世退のゆく法と栄給ふ古のことをとひつゝまとふへりゆま
なかくましくて位のかるを給ふなるとくへよぬをとわかるを
世とあらくハそともさらぬ物をかとおほしめすにかうまてせと
のかれ給ひんと成へし　河大友皇子天智天皇十年正
月任太政大臣　廿五　天武天皇元年五月依事被誅　廿六
兼三条左大臣兼和七年八月七日任右大臣　廿九　左衛
元年十六月十三日薨　四十五丁時　左大臣左大将　是未例之源氏于時二十
栄也和漢之例稀多之
此治世みまとゆかりのほとおほしめし給ふてなるこゝろなり給ふあり
て　栄　源氏乃御ささく冷泉院乃治代よりも名をあらはす治世おほし

とのはん如へし

志つかなるへしと思へは如此ありて　細　後々の事也此事如へ

に命長の命をまてと也　弄　命ある幸との事なり

思ひしに叶へり弟幸可思　某　左遷の時の其にかゝりて

とをとあるへ行て侍る人語をと也

いまうてをのするてく　河　延也

今をまた娘乃侍る人ハ程命うしろめてし者所々にあまたあるその

ちの世にはとはとめらいとよりひとをものゝあんとおもひし

ゑめ　某　源氏乃春命をもとあまされし静にあまたあて

後乃世のはとめとし行てよりひとの為ん也

山里の嵯峨なる紙志めて御堂をはくらを行ひ仏経のいと

なみなへくせさを行める　某　嵯峨に御堂をとゝてられ

あらそ松風乃声にとる大井乃宿のかをとやうくいさ

しかさ大を山にいるゝ也嵯峨乃山荘の中あるへくさ

しいゝ也松風あるに此春ゆかるゝ也をとく　孜　松風をふむへ此春

よりと云ふ此巻にいるゝ也るゝし也

も遠の君もち思ふさ隙よりしつさいゝてめんと思ひし　すゑの君たち

めはむすとしてもそ行なんらそいかうをさる

細　夕霧所明石乃姫君也　弄　同君也

某　夕霧又を明石乃姫君をとふ後にしつさとしてさめん

とやそくにせとをもとしもさて語りあと也

いふおもはしとさはつくふと志るを如にし

細　若ゝ地也　某　例乃式ある面法也